

歴史的環境資源の活用に着目した多主体協働のまちづくりと 地元市民組織に関する研究

—兵庫県神戸市・兵庫津エリアを対象にして—

A Study on Multi-agency Collaborative Community Development and Local Citizen Organizations
with a focus on the Utilization of Historical Environmental Resources

- A case of the Hyogo-no-tsu area in Kobe city, Hyogo prefecture -

○陳鉞^{*1}, 山口秀文^{*2}, 山崎寿一^{*3}

CHEN Cheng, YAMAGUCHI Hidefumi, YAMAZAKI Juichi

This study is targeting the Hyogo-no-tsu area of Kobe city. Focusing on two of the local civic organizations for the community development in multi-agency collaboration by using historical environmental resource. The research in order to solving the above issues,

1) Clarify the background in the early of its establishment and positioning in the overall urban planning. And the problems of the town planning system are clarified by examining the actual use of historical environmental resources.

2) Clarify the development of the local community through the function of the two organizations. And clarify the role and importance of the two organizations in community development.

キーワード：まちづくり，歴史的環境資源，多主体協働，地元市民組織，兵庫津

Keywords: Community development, Historical environmental resources, multi-agency collaboration, Local civic organizations, Hyogo-no-tsu

1. はじめに

1-1. 研究の目的と位置づけおよび目的

本研究は地域の歴史的環境資源を活かしたまちづくりに関する研究である。歴史的環境資源を活かす場合、例えば、過去に地域が栄えていたある一時期に特化するなど、過去と現在という2時点での関係でのまちづくりが多くみられる。しかし、地域は、栄えていた時期から衰退したとしても、シームレスに現在まで繋がっている。これを、繁栄—衰退—現代という地域の歴史の流れと捉えると、繁栄は繁栄した時期及びそれまでに形成された地域の原型、衰退は地域の課題が顕になった時期、現代は地域の課題を解決していく時期、と大きく考えることもできる。ここで筆者らは、この課題を解決する現代におけるまちづくりでは、地域の「原型」^{注1)}とその空間構造をその形成過程から読み取り、それを踏まえた上で地域の課題を解決しつつ、現代までシームレスな歴史のつながり、その歴史の継承と現代における創造というアプローチが重要であるとの視点から研究を進めている。

上記より、本研究では兵庫県神戸市兵庫区の兵庫津(ひょうごのつ)^{注2)}エリアが、まちづくりに対して以下のような実態、特徴を持つことから研究対象として選定した。

(1)大輪田泊と呼ばれた古代よりの歴史をもち、港町及び戦国末期の城下町(図2左)を基盤に、北前船寄港地として栄えた近世における地域の原型を持つこと¹⁾。

(2)明治以降の近代化による開発、つまり、兵庫運河開削、鉄道・幹線道路の開発、工場地帯の形成と、戦災による近世の歴史的環境資源の消失があったこと²⁾。

(3)地域の衰退に伴う、工場跡地、兵庫運河、点在する歴史的環境資源の活用・整備が都市計画、まちづくりの課題となっていること³⁾。

(4)近年兵庫県による兵庫津ミュージアムの構想が進められ、昨年2021年11月の初代県庁館(復元施設)の開館、今年度のはじまり館の開館(今秋予定)により、歴史的環境資源を活かしたまちづくりの機運が地元、行政(兵庫県、神戸市)共に高まっていること。

このような特徴を持つ地域であるが、近世の歴史的環

*1 神戸大学大学院工学研究科 博士後期課程

*2 神戸大学大学院工学研究科助教 博士(工学)

*3 神戸大学大学院工学研究科教授 博士(工学)

PhD Candidate, Graduate School of Eng. Kobe Univ.

Assistant Professor, Graduate School of Eng., Kobe Univ., Dr. Eng.

Professor, Graduate School of Eng., Kobe Univ., Dr. Eng.

境資源に関しては兵庫県による兵庫津ミュージアム、近代の兵庫運河を代表とする歴史的環境資源、近代開発による地域の課題などについては神戸市の事業や開発で、個別に対応している状況であり、近世から近代、戦後、現代までの歴史とつなぐ視点でのまちづくりには至っていない。地元、兵庫県、神戸市、専門家との協働が課題であり、この近世から近代、戦後、現代をつなげるまちづくりとするのが大きな課題となっている。この課題に対して、前述した筆者らの視点から現状を捉えることでその解決に寄与することができると考える。

一方、まちづくりを担う地元市民組織として、地元からの発意による自律的な活動を行う二つの団体の活動に、前述の課題、近世から現代までをつなぐまちづくりを展開できる鍵があるのではないかと考えている。

本研究では、神戸市・兵庫津エリアを対象に、多主体の共同により進められているまちづくりの実態を、歴史的環境資源の活用という着眼点から整理し、地元市民組織の自律的な活動による地域協働・参画の展開とそのまちづくりの仕組みを明らかにすることを目的とする。

1-2. 研究の方法 (図1)

本稿の1章~4章の論旨展開は以下による。(図1)

- (1) 研究対象である兵庫津エリアの概要を述べた上で、まちづくりの歴史的環境資源について整理する。
- (2) 兵庫津エリアでまちづくりの現状を把握する。行政(兵庫県と神戸市)が主導した活動の仕組みを明らかにし、地元民間企業・市民らの取り組みの概要を述べる。
- (3) 地元市民組織の発足・活動プロセスを明らかにする。
- (4) 最後に、地元、兵庫県、神戸市の協働の中で、特に地元市民組織主体のまちづくりの仕組みを明らかにする。

調査の概要は以下である。

- ① 兵庫県企画部地域振興課、神戸市企画調整局、兵庫区まちづくり課へのヒアリング調査と行政の資料を基に、全国の政策と行政の地域創生、都市計画の基本構想と対象地のまちづくりとの関係から、事業・活動の現状と既存の推進仕組みを把握していく。
- ② 歴史的環境資源を活かしたまちづくりに取り組んでいる地元組織(よみがえる兵庫津連絡協議会、兵庫津日本遺産の会、西出東出地区まちづくり協議会)、関連企業(榎屋五兵衛)のリーダー層へのヒアリング調査を基に、地元がまちづくりをスタートさせた動機と組織の設立経緯、まちづくり活動の発展段階を明らかにする。
- ④ 連絡協議会のHPから得られた情報を加え、調査対象

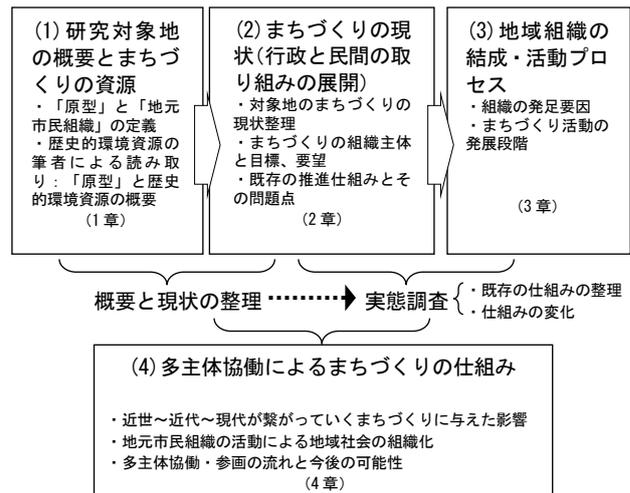


図1 本稿の論旨展開

とする二つの地元市民組織(後述)について、最初の活動段階から現在に至るメンバー構成と地域資源の利用実態の変遷から、地域社会の組織化に与える影響を明らかにし、地域の多主体協働のまちづくりにおける協働・参画の流れと今後の可能性を明らかにする。

1-3. 語句の意味・定義と調査エリア

1) 「地元市民組織」と調査対象の選定理由

本研究では、歴史的環境資源を活かした多主体協働のまちづくりの実態について、活動の主体を行政と地元市民に分けて考察を進めていく。また、そのまちづくりを担う地元市民による組織には、行政の末端組織でもある自治会、行政により認定された協議会、行政が主導して結成された組織、地元有志による研究会など様々な組織がある。本稿では、研究目的と照らし合わせ、地元市民が自律的に結成したまちづくりのための活動組織を本稿の「地元市民組織」と定義し、行政側が主導・推進した組織・フォーラムと区別している。

兵庫津に関する歴史的環境資源の活用について、地元のT氏は2000年頃から現在まで、様々な取り組みに関連・参画しており、T氏を中心にした二つの地元市民組織は、日本遺産認定と現在までの歴史的環境資源に関わる活動の中心組織とし、兵庫津をテーマにしたまちづくりに一貫して関わっている。そこで本研究では、歴史的環境資源の活用に向けた地元市民組織の発足、活動の発展段階の実態調査を進めるため、T氏を中心にした二つの組織(よみがえる兵庫津連絡協議会・兵庫津日本遺産の会、以下「連絡協議会」と「日本遺産の会」と称する)を対象とすることが適切と考えた^{注3)}。

2) 調査エリアと歴史的環境基盤の現状(図2・右)

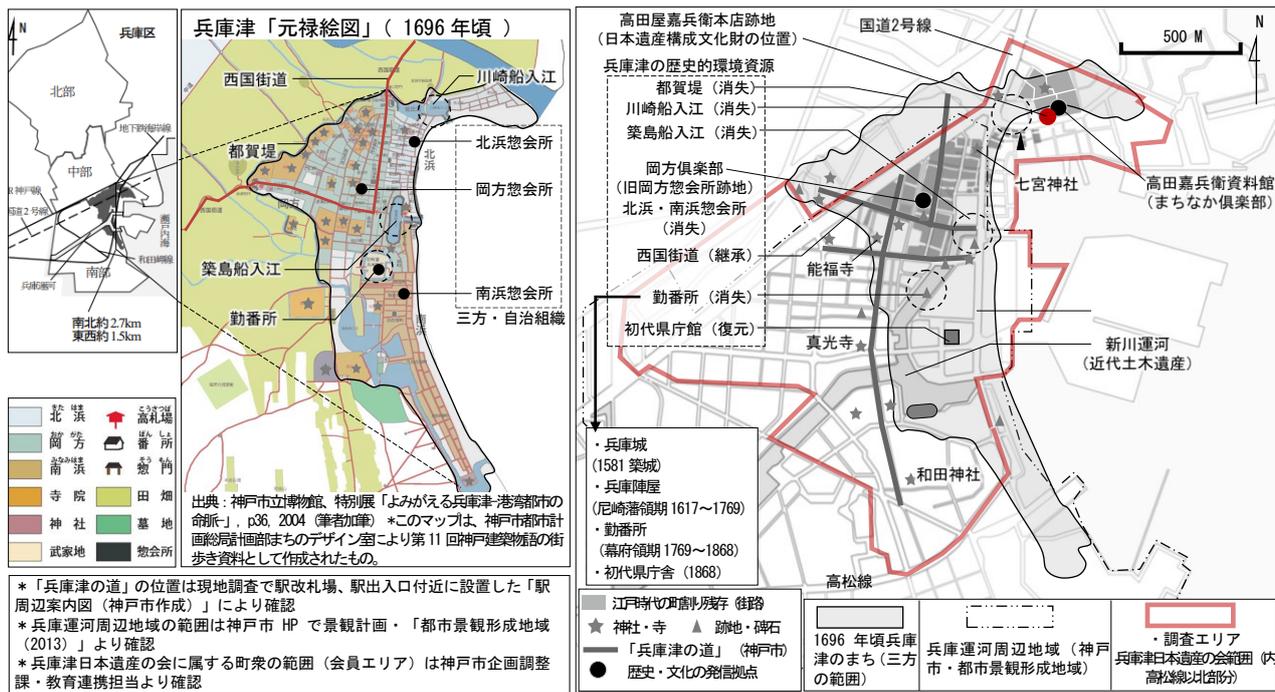


図2 1696年頃兵庫津（原型）の歴史的環境基盤の位置図とその現状及び調査エリア

江戸時代の兵庫津は、図2左の「元禄絵図」^{注4)}に示すように、勤番所を中心に、岡方・北浜・南浜という「三方」の町場とその自治組織によって構成された城下町を基盤とした宿場町・港町である（人口約2万人）。発掘調査で作成された「復元図」⁴⁾と合わせて、兵庫津の空間構成要素（勤番所、港拠点、西国街道、寺社地）の位置とその継承、消失、復元の現状が確認できる。

本稿では、2017年に設立された「兵庫津日本遺産の会」の会員エリア^{注5)}を用い、国道2号線以南から高松線以北に至る部分を本稿の調査対象のエリアとする。

2. 研究対象地のまちづくりの現状

2-1. 行政・民間の取り組みとまちづくりの目標

表1 初代県庁館の復元事業を軸とした事業・活動の展開（兵庫県主導・推進）

期間	組織主体	背景・目的	主要な事業・活動の内容
1991～戦災復興	兵庫県（知事）	段階① 地元自治会から新川運河周辺の再整備に係る陳情・支援要望と当時の県知事より想い 阪神・淡路大震災発生	行政と地元主体で県の「はじまり館」に関する調査・研究に取り組んで、震災復興の中で地域活性化の核として企画されていた。
1998～	兵庫の歴史資料館基本構想検討委員会	兵庫の歴史資料館（仮称）基本構想検討	歴史を身近に感じる参加体験型、地域活性化の核となる施設
2004～	県庁発祥地記念事業研究会	段階② 神戸市中央卸売市場本場再整備の基本構想に着手（市）以降、市内において、市場本場跡地の利活用について検討（2004～2006）	県政情報を発信するとともに兵庫津の歴史に触れ、集い、学ぶ、地域の活性化のための拠点施設。初代県庁の復元施設整備の検討、平面図・復元模型の作成
2006～	初代兵庫県庁舎整備検討委員会		兵庫県人としてのプライドを喚起する本物志向で、可能な限り忠実に復元し、「初代県庁整備検討委員会報告書（2009年）」：県・市が連携し、初代県庁舎の整備に向けた具体的な取組み
～2015	兵庫県・県民生活課	県民の参画と協働の推進	兵庫津をテーマとしたラジオ番組放送、講演会の開催、周辺マップ発行、ジャズライブの開催
2017～	県庁発祥の地記念事業検討委員会	「初代兵庫県庁の復元」と「県政資料館的施設」の併設が望ましい	「兵庫県庁発祥の地記念事業検討委員会報告書（2018）」：復元施設はロケ等で使用できるように内部も含めて忠実に再現し、復元施設とは別に展示機能を担う資料館的施設の併設が必要
2017	県政150周年記念事業推進協議会（企画委員会、推進本部）	兵庫県政150周年記念地域事業の推進	県庁発祥の地の整備（2018～2022） 県庁設立の日記念イベント（2018）
2018～2019	県政資料館（仮称）基本計画策定委員会	段階③ 1）県市連絡会議、県市調整会議において、県と市で協調して事業を進めていく旨合意 2）県庁発祥の地整備	県政資料館（仮称）基本計画策定委員会（2018年）：2019年、「県立兵庫津ミュージアム（仮称）基本計画」策定（2019）
2019～2021	兵庫県・地域振興課 いるか設計集団（外部組織）		兵庫津によるプロポーザルに基づく復元施設の企画・設計・実現（2021年開館）
2018～2019	神戸県民センター	県政の基本姿勢である「参画と協働」の基本理念	県民連携事業（4）：①講演会「兵庫津の歴史を語る」（2018）、②兵庫高校生による源平歴史街道ツアー（2018）、③地域の呉人さんと兵庫津を歩こう（2019）、④平清盛900歳祭（2018）。

注：兵庫県地域振興課のY氏へのヒアリング調査と、参考文献8) 9)を基に作成。

兵庫県企画部地域振興課、神戸市企画調整局（都市計画・事業の推進）と兵庫区まちづくり課（地域活動の支援）へのヒアリングと神戸市HP掲載の行政資料を基に、行政（兵庫県、神戸市）と地元に分けて、全国の政策と行政の都市計画との関係から、対象地のまちづくりの展開状況を以下に整理した。（図3、表2、図6）

1) 兵庫県の地域創生による事業・活動（表1）

兵庫県内の地域創生を目的に、1991年頃～2022年まで、「はじまり館」の実施を軸として、県が一連の事業・活動を対象地（兵庫運河周辺）で実施した。

事業の初期段階から関わっている兵庫県企画部地域振興課職員へのヒアリング調査、「県政150周年記念事業（協議事項説明資料）」⁸⁾、「県立兵庫津ミュージアム（仮称）

基本計画（2019年）⁹⁾の概要を基に、図6（県主導の事業）と表1（「はじまり館」）に示すように、「兵庫県・初代県庁館の復元」は、①震災復興の中で地域活性化の核（1991年～1995年後震災復興・「はじまり館」）、②県政150年記念に向けて初代県庁の復元施設とする検討・本格的にスタート（1998年～2017年）、③県政150周年記念事業施設と現代的活用の拠点施設とする設計・実現、日本遺産兵庫津（2017年）の活動拠点とする活用（2018年～2021年）という3つの段階に整理できる。

表1には、復元事業の実現までの経緯で、兵庫県推進の検討委員会・研究会等の高い専門性をもつ組織が参加している一方、県民生活課と神戸県民センターが助成の官民連携事業で、兵庫津を意識した上で地元組織と地域外組織主体の交流も促進されてきたことがわかった。

2) 神戸市による地域活性化の事業・活動

2000年以降の地域では、「神戸市マスタープラン（2011年）」による新たな位置づけ（兵庫運河周辺地域：神戸のにぎわいや活力の創造を先導するリーディングエリアと工場跡地の大規模土地利用転換）とまちづくりの新しい課題（神戸市・市街地西部地域活性化）に従い、地域固有の価値を活かすまちづくりの時期に入った。

対象地では、国道2号線の開発により兵庫区南部市街地が分断され、都市施設が新川運河プロムナード（1993年）周辺へと集約されることになっており、また2008年に国土交通省による「運河の魅力再発見プロジェクト」の認定を受け、神戸市により行政・周辺住民・企業等で「兵庫運河活性化会議」を組織し、兵庫運河周辺地域（神戸市・市街地西部）を対象に、運河の親水空間を活かした様々な取り組みが進められている。（図3）

3) 地元民間企業・市民らの取り組みの概要（表2）

一方、兵庫津という地域固有のアイデンティティが希薄化した状況を改善するために、行政と地元と連携し、歴史に関する情報看板を設置し、歴史講座や展示会、街歩きイベント等の活動が進められている。特に、日本遺産兵庫津の認定と初代県庁館の会館を契機に、地元は、兵庫津に対する行政と住民の関心を喚起させるための取り組みを試みている。また初代県庁館の復元を契機に、旧兵庫津・勤番所という象徴的な空間を再現し、日本遺産の歴史を語るストーリーの視点から、単なる忠実な復元以上の現代的な意味をもっており、消失した象徴的空間を古くて新しいシンボルとして位置づけ、地元により運営されている地域に点在する歴史的環境資源・活動と



表2 まちづくりの関連事業・活動（2000年～2022年）

目標	行政主導の事業	民間等の取り組み（官民連携を含む）
兵庫運河活性化	神戸市都市計画整備事業と市街地西部地域活性化： ・兵庫運河プロムナード整備、沿岸ライトアップ事業（1993～2021） ・中央市場再整備（2004～2006） ・橋梁改修（道路） ・市街地西部活性化プロジェクト（2014～2017） ・小型船舶乗場整備（新川運河） ・案内サイン	・兵庫運河祭、武待祭り ・真珠貝プロジェクト ・水面利用（レガッタ） ・イオンモール神戸南と沿岸プロムナード整備（陸側）
兵庫津の魅力発信	兵庫県：県立兵庫津ミュージアム（初代県庁館を含む） 神戸市：歴史講演会、案内サイン（大輪田泊、平清盛、兵庫津等の歴史）、西国街道再現事業（AR・看板）、「兵庫津の道」整備 兵庫区：街歩きイベント（ボランティア募集、マップ発行）	・岡方倶楽部（活動拠点） ・高田屋嘉兵衛歴史資料館 ・兵庫津案内処（発信拠点） ・歴史情報看板（兵庫津歴史） ・歴史街歩きコース（神社・寺との連携、資料とマップ発行）

注：参考文献5) 6) 7) の内容とヒアリング調査（よみがえる兵庫津連絡協議会 T 氏、区役所まちづくり課職員）により得られた情報をもとに作成。

表3 まちづくりのフォーラムと歴史的環境資源の関連

推進フォーラム	対象地内の関連組織	歴史的環境資源の活用の事業・活動	
		ハード面	ソフト面
フォーラム①：兵庫運河活性化会議（神戸市推進）	・明親校区まちづくり協議会、和田岬校区防災福祉コミュニティ（2）	「兵庫津の道」街路整備と看板設置、西国街道の再現（2022）	市街地西部活性化プロジェクト15助成事業の実施（内に1歴史相關）
フォーラム②：兵庫区民まちづくり会議（兵庫区推進）	明親校区まちづくり協議会、兵庫七福神実行委員会、和田岬校区防災福祉コミュニティ、明親校区ふれあいのまちづくり協議会、和田岬ふれあいまちづくり協議会、入江地域ふれあいまちづくり協議会、よみがえる兵庫津連絡協議会、明親小学校PTA、兵庫運河を美しくする会、西出東出まちづくり協議会（10）	「兵庫区歴史花回道構想整備」（案内看板助成）	「兵庫区歴史花回道構想整備」（散策マップ作成）、歴史講座、街歩きイベント

注：参考文献7) 「第12・13期兵庫区民まちづくり会議活動報告」の活動内容に基づき作成、下線は歴史的環境資源の活用の関連事業と組織。

体系的に繋がっていく拠点を提供したといえる。

図3には、上述の背景や上位計画に従い、対象地で進められているまちづくり関連の事業・活動および拠点施設の分布を示している。表2には、対象地では、現在、事業・活動で注目される地域資源が異なるため、「兵庫運河活性化」と「兵庫津の魅力発信」という2つのまちづくりの目標が併存していることが窺える。

2-2. まちづくりの推進の仕組みとその問題点

対象地における事業・活動に関しては、協働の仕組みからみると、2つの官民連携のフォーラム（行政推進）はそれらを推進する主な仕組みとなっており、関連組織、歴史的環境資源との関連性を以下に整理した。（表3）

1) 行政による推進した二つの官民連携のフォーラム

まずは、神戸市・企画調整局により兵庫運河周辺地域の活性化のために推進した「兵庫運河活性化会議」⁵⁾（フォーラム①）である。2009年に設立された「兵庫運河活性化会議」⁵⁾は、運河を核にまちづくりの展開を目

指し、地域団体（4）・企業（7）・専門家（4）と行政（13）の計28団体（対象地内2組織）により構成される。2012年に「兵庫運河周辺地域のまちの将来像」を策定し、兵庫運河を軸としたまちのビジョンがワークショップで明確にされ、運河プロムナード整備（ハード面）を推進した事業である。その中には、歴史的環境資源の活用に関連した組織は参加していない。ハード面の事業は神戸市により指定される「兵庫津の道」沿いに看板が設置されているが、兵庫津の原型の西国街道（中央通り）に意識して実施されたことでは言えない。今年（2022年）3月には、地元市民の要望に応じて、神戸市企画調整局は、西国街道で街並みの再現事業（AR技術）を実施した。

一方、兵庫区では、1993年に設置した「兵庫区民まちづくり会議」⁷⁾（フォーラム②）に基づいて総合的なまちづくりにおける多様な事業の支援、多主体（2019年計52団体、対象地内10組織）の交流・参画で、多様なテーマのソフト面の企画・支援の事業が行われてきた。その中には、兵庫津の歴史的環境資源に関わるハード面の事業は歴史案内看板の助成と設置、ソフト面の事業は散策マップの作成と街歩きイベントの展開で、兵庫津をテーマにした活動と関連団体（10組織内に1組織のみ）は少なかったことがわかる。

2) 既存の仕組みとその問題点

神戸市のまちづくりの仕組み（図4）を基に、地元の自治会やまちづくり協議会による総合的なまちづくり、防災福祉コミュニティによる福祉系のまちづくり、地元の有志に基づく兵庫商人プライドの継続（発想）、という多様な地縁組織や地元市民によるまちづくりへのアプローチが存在しているが、既存の推進の仕組みが縦割りで別々に対応しているゆえに、地域活動が分断されている局面も見受けられている。

図5には、地域内の二つのフォーラムにより、行政の都市計画事業との関係、二つのまちづくりの目標（①、②）と対応する事業・活動の推進仕組みを示している。

全国の政策に基づく二つのまちづくりの目標が推進されてきた実態をみると、目標①（兵庫運河活性化）では、行政が推進した二つのフォーラムに基づいて課題を共有・解消する仕組みが立てられていることがわかった。

しかし、目標②（兵庫津の魅力発信）では、兵庫県と従来の地元の自治会やまちづくり協議会が各自の活動範囲で事業・活動が点的に展開されたことはあるが（図2の分布状況と表1中の「民間等の取り組み」を参照）、兵庫津の原型を意識した一体のものとしてまちづくりが

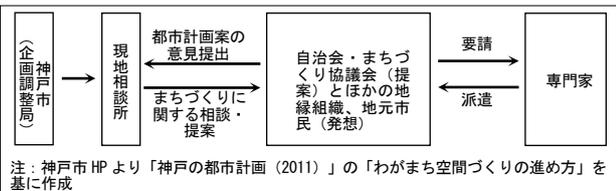


図4 神戸市のまちづくりの推進の仕組み

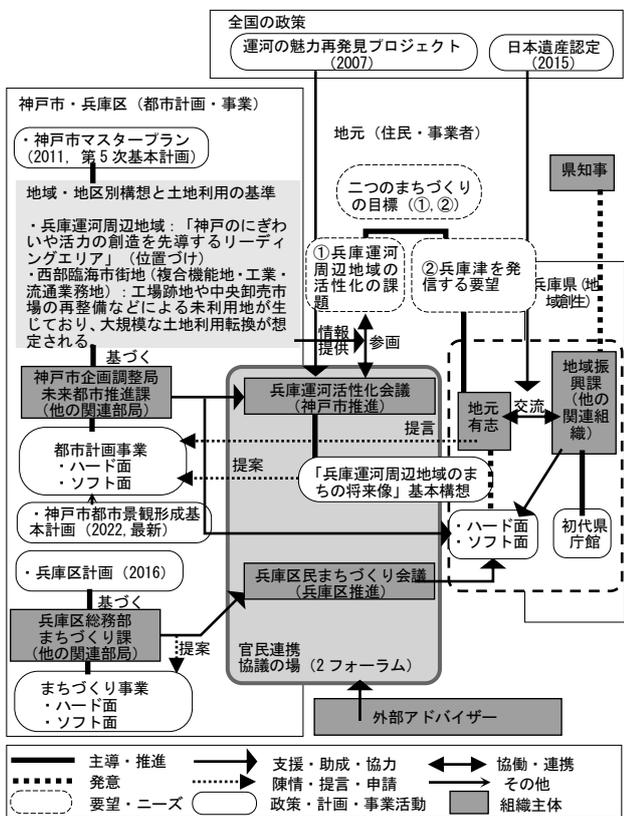


図5 二つのフォーラムによるまちづくりの推進仕組み

進められていくことに至っていないと考えられる。

二つの目標に対するまちづくりには、並行の関係でバランスをとること、あるいは対抗の関係で一つを軽視することのジレンマではなく、兵庫津の原型が現代にシームレスに繋がっていく視点で、行政と地元の多主体の発想・要望を包括した上で、その参画・協議の場および仕組みを構築することが必要であると考えられる。

3. 歴史的環境資源の活用に向けた地元市民組織の発足と活動の発展段階

以上より、行政側（神戸市）が兵庫津の魅力発信という課題を軽視していることに対して、地元の有志は、古来より兵庫津の歴史・文化を活かすまちづくりの中心となる二つの市民組織（2008年、2017年）を結成し、行政と地元の住民、事業者、神社・寺および外部のアドバイザーに呼び掛け、兵庫津の魅力発信と日本遺産申請等の活動を積極的に行ってきた。本稿のヒアリング調査では、兵庫津の歴史的環境資源を活かしたまちづくりのキーマンとなるT氏と2つの地元市民組織のリーダー層にインタビューし、地元を主体としたまちづくりの歩みの概要と活動の発展段階を以下に整理した。（図6中の「地元を主体としたまちづくりの歩み」を参照）

1) 萌芽期（2000年頃～2008年）

①樽屋五兵衛の継続と兵庫商人のプライド

連絡協議会会長のT氏は江戸時代に兵庫津において樽を製造・販売していた商家「樽屋五兵衛」の12代目である。高田屋嘉兵衛や北風正造、工樂松衛門などの兵庫商人は、江戸時代に兵庫津を建設・運営する主な力となった。「商人層による自治」は兵庫津の「風土」と地元の事業者や元事業者では考えられている。

2008年にかつての屋号「樽屋五兵衛」でアンテナショップを開店したところ、地域のご老人がよく店を訪ねてくるようになり、「昔は、ここはこうだった」などと、昔の兵庫津の話を多く聞くようになった。そういう経緯から兵庫津のことをより知る必要があると感じたT氏は先祖からのブランドを継続する一方、兵庫商人により生まれた地域の風土を地域に再生し、兵庫商人のプライドと兵庫津のアイデンティティを伝えることが、まちづくりをスタートしたきっかけであると述べていた。

2) 模索期（2008年～2012年）

②「よみがえる兵庫津連絡協議会」の設立

兵庫津をより知る必要を感じたT氏は兵庫津で商売をしている知人・友人9名（9社）（図7参考）で2008年

に「よみがえる兵庫津連絡協議会」を結成した。初期活動は、明確な目標や会則は全くなく、各会社を活動の場とし、月に1～2回の勉強会や情報交換会を行っていた。

③3つの軸で地域の歴史を発信する

2012年NHK大河ドラマ「平清盛」の全国放送をきっかけに、連絡協議会は県（観光部）と連携し、地域内の神社・寺で清盛茶屋を設置し劇や演奏会を行った。

同時に、兵庫運河活性化の方針に従った兵庫運河で歴史案内看板の設置に加え、地域では、兵庫運河の水面・親水空間の利用、平清盛の文化的発信（歴史案内看板）、神社・寺の境内空間の活用、という3つの軸でまちづくりを展開したと考えられる。

3) 成長期（2012年～2017年）

④岡方倶楽部を拠点とした活動の展開

重要な拠点施設となる岡方倶楽部は、江戸時代の兵庫津の岡方惣会所の跡地に兵庫商人の社交場として1927年に築かれた倶楽部建築である。2013年から、岡方倶楽部は兵庫津歴史資料館として3階ホールが利用され、それを拠点に、連絡協議会は、2012年の平清盛関連の神戸市のガイドボランティアのうち3名を歴史アドバイザーとしてメンバー（オブザーバー）に加え、来訪者に向けて歴史案内とガイドウォークなどの活動を日常的に展開し、年に3～5回の兵庫津歴史展示会や講演会を行った。

また行政と地域企業との連合で、毎年連絡協議会の総会は3階で開催され、多様なテーマを検討し、地域のまちづくりにおける重要な協議の場になった。

⑤「兵庫津日本遺産の会」の結成

2017年に、よみがえる兵庫津連絡協議会のT氏を中心に行政と協議し、神戸市は兵庫津・北前船寄港地という地域固有の歴史・文化を発信するために、文化庁に申請（日本遺産）した。「北前船寄港地を活かしながら、地域住民が活動する」という審査基準を満たすために、T氏は当時の兵庫区まちづくり課と相談して決めた自治会を基に、関連の市民組織と連携し、「兵庫津北前船日本遺産を目指す会」を結成し、翌年に日本遺産の認定を受け、「兵庫津日本遺産の会」（以下「日本遺産の会」と称する）と改称した。

4) 発展期（2018年～）

2018年から、毎年、日本遺産の会と連絡協議会との合同で車座討論会を開催し、地域の会員と縁のある人、神戸市・兵庫県の関連部署も参加し、まちづくりのテーマを検討している。2つ団体の連携から、地元を主体としたまちづくりの時期がスタートしたといえる。

4. 多主体協働における地元市民組織主体のまちづくり

以上の5つの発展段階を経て、二つの地元市民組織の結成と活動が近世から近代・現代の資源を繋げていく上で、地域社会の組織化、まちづくりの参画の流れにどう影響したのかについて、以下に整理した。

4-1. 近世—近代—現代の資源が繋がるまちづくりのネットワーク

現在、T氏を中心とした二つの地元市民組織は、包括される自治会・まちづくり協議会・寺社・企業（事業者）・アドバイザーに加え、多種類・多機能の活動拠点を創出すること（3つの「兵庫津案内処」の設置）に重きが置かれ、また初代県庁館の復元施設と現代大型商業施設（イオンモール）という時代を超えて兵庫津のアイデンティティの伝承を踏まえた多様な空間・場所の連動によって、従来の点在している地域資源が兵庫津日本遺産というテーマでまとめられ、行政・地元組織と連携するとともに旧兵庫津の空間・社会の文脈を基盤とした新たなまちづくりの空間的・社会的ネットワークを醸成していくと考えられる。

4-2. 兵庫津の原型に基づく地域社会の組織化

連絡協議会は、最初の9名（9社）の兵庫商人により始まり、現在は地域内・外（計29社）の企業を会員とする一方、地域の寺社（12ヶ所）と地域外からのボランティア（2名）もアドバイザーとして参加している。日本遺産の会は現代版の兵庫津の町衆を再構成するために、地域における10自治会と3まちづくり協議会、1防災福祉コミュニティ、2財産区という15地区の団体と連携して

いる。また、二つの地元市民組織のリーダー層は、自治会の役職も兼務していることがわかる。（図7）

そこで、二つの地元市民組織による、兵庫津の原型の空間・社会の文脈を基盤に、兵庫津をテーマにした多様な活動を通して、地元の市民と神社・寺、事業者が一体となるまちづくりの中心組織が構築されていると言えるのではないかと考えられる。

4-3. まちづくりのフォーラムとなる可能性

図6中の5つの発展段階におけるまちづくりの協働・参画の流れからみると、兵庫津というアイデンティティの発信を意識した活動を経たことで、現在の地元市民組織は、当初T氏の思いによる地元事業者の連携に基づいたインフォーマル・フォーラム（2008年）としてスタートし、行政や地元の関心に基づく個別のプロジェクト（2012年～2013年）が生み出され、行政と地元の組織主体と協力して参画を進める組織として機能し始めてきた。また、兵庫津日本遺産の認定の目標が地元の多組織主体間で共有化され（2017年）、兵庫津をテーマとするまちづくりの協議の場（フォーラム）として連携した二つの地元市民組織（2018年～現在）は、さらに、地域外の協力・支援とともに行政・市民・専門家（大学）が参画したことで、より公共性・専門性を高めた多主体協働の場を構築し機能してきたといえる。

こういう地域協働・参画の流れをベースに、二つのまちづくりの目標（発意）に対応し、地元市民組織を中心としたまちづくりの仕組みは、当初のインフォーマル・フォーラムから可視化の高いプラットフォームのような組

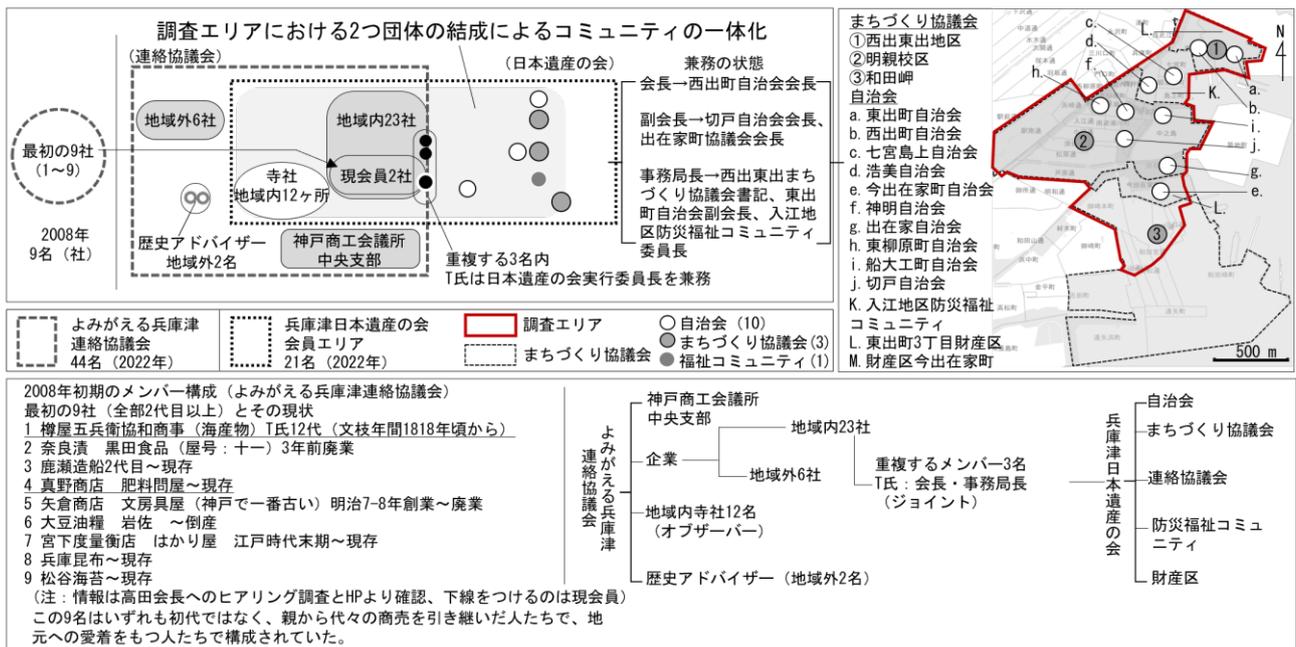
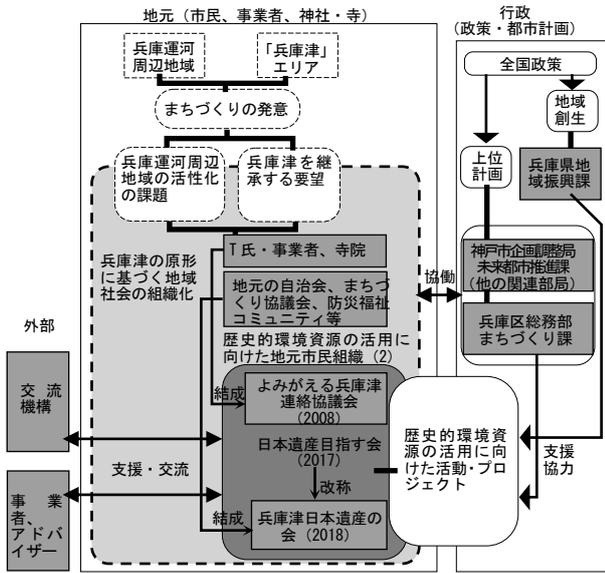


図7 2つの地元市民組織のメンバー構成と地域の自治会との関連性

組織構造・機能を備えた組織へと発展する可能性があると考えられる（図8）。



注：凡例は図4に参考。
 図8 兵庫津の原型に基づく地域社会の組織化によるまちづくりのフォーラム（二つの地元市民組織）

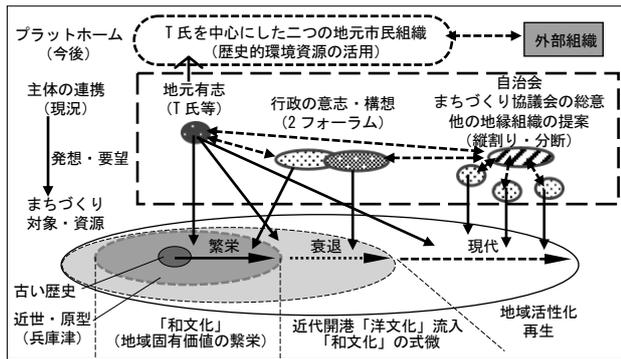


図9 「近世—近代—現代」の資源が繋がっていく多主体協働の中心となるプラットフォームを想定する構図（仕組み）

5. まとめ

本稿では、兵庫津エリアで展開している多主体協働によって進められているまちづくりの実態を、歴史的環境資源の活用という着眼点から整理し、特に地域が自発的に成立した地元市民組織の発足と活動の発展段階、そして主体としたまちづくりの流れ・仕組みを考察した。

得られた知見を以下にまとめられている。

(1)まず、兵庫津の「原型」という概念を用いて、地域の歴史の変遷を「繁栄—衰退—現代」という時間軸でシームレスに捉え、研究対象の調査エリアを設定し、それに基づく歴史的環境（資源）の現状を地図上に整理した。

全国の政策と神戸市・兵庫区の都市計画に従い、対象地に関わるまちづくりの現状を、行政と地元の主体に分けて整理した。既存のまちづくりの推進仕組み（行政主

導）について、歴史的環境資源の活用との関連性から、活動を推進するための中心組織と協働・参画の場が必要であるという問題点を提示した。

(2)次に、地元市民組織の設立に至る背景経緯を、萌芽期、模索期、成長期、発展期に至る①から⑤の5つの発展段階に整理し、最初の「兵庫商人のプライド」を伝える動機から、「兵庫津北前船寄港地」という地域に根ざしたアイデンティティを伝承・発信するまちづくりの場になったことが明らかになった。兵庫津エリアでの十数年の活動は、T氏を中心とした個人間の関係、企業（事業者）の連携による企業間の関係、行政セクターや地域内外の組織主体との連携による組織間の関係の形成が確認できる。地元市民組織の行動によって、複数組織の連携が習慣化されることから、地域資源を動員して地域社会の組織化と地域力を引き出すことが推進されてきたことが窺える。

(3)最後に、地元市民組織の活動によって、兵庫運河活性化と兵庫運河プロムナード整備に関する事業・活動、特に兵庫津日本遺産認定、初代県庁館の復元事業と結びつけており、地元からの要望がそれらの事業推進に大きな契機となしたことを明らかにした。

二つの団体の結成・連携は兵庫津の魅力発信の要望に応える協議の場になる一方、今後の近世—近代—現代の資源が繋がっていくまちづくりの推進仕組みとして、多主体協働のプラットフォームの構築をすることが重要な次のステップと位置づけられると考える。（図9）

謝辞

本研究の調査にあたり、よみがえる兵庫津連絡協議会、兵庫津日本遺産の会、兵庫県企画部地域振興課、神戸市企画調整局、兵庫区まちづくり課の皆様にご協力いただきました。ここに感謝申し上げます。

注釈

- 注1)地域の原型とは、本稿では、地域の形成過程のうち、その初期の形態や構造（例えば、京都・平安京のグリッド状の都市など）や、最も繁栄した時期の形態や構造（例えば、伝建地区に指定されている宿場町や船主集落など）のように、その地域の特徴をよく表している時期の都市や集落の形態や構造のことを指す。本研究の対象地域である兵庫津エリアでは、後者の最も繁栄した時期として近世・江戸時代の形態・構造を原型としている（図2）。
- 注2)江戸時代の兵庫津では、町部と田園部に分かれ、町部を「地子方(ぢしかた)」田園部を「地方(ぢかた)」と呼んでいた。地子方はさらに岡方・北浜・南浜の三方(みかた)に分かれ、岡方は浜に接しない町々を総称していた。本稿で取り扱う「兵庫のまち」あるいは「兵庫」は、兵庫の市街地いわゆる「地子方」である。
- 注3)県、市の行政関係者へのヒアリング調査において、地域の歴史的環境資源を活かした地元のまちづくり団体としてこの2者の名前が上がっており、行政からもそのように認知されている組織である。
- 注4)図1の注より
- 注5)神戸市は、神戸市文化財保護委員会の指導で、1998年～2017年の62次の兵庫津遺跡発掘調査を実施された。本稿では、「第42・52次

調査報告書元禄期復元図」(参考文献 4)を参照し、江戸時代中期(1696年頃)と現在の空間要素の変化を把握することが可能である。

参考文献

- 1)新修神戸市史編集委員会：新修神戸市史歴史編Ⅲ近世,pp.86-87, 1989
- 2)中江研：神戸市 新修神戸市史編集委員会, 新修神戸市史 生活文化, pp.114-138, 2020
- 3)陳鍼, 山崎寿一, 山口秀文：近世の兵庫津を基盤とするまちの解体と再構成についての考察, 神戸大学大学院工学研究科・システム情報学研究科紀要, 2022
- 4)神戸市教育委員会：兵庫津遺跡第 52 次発掘調査報告書 元禄期復元図, p. 5, 2011
- 5)神戸市 HP：企画調整局 未来都市政策課 兵庫運河周辺地域のまちの将来像, 2012.12 (参照 2021.11)
- 6)神戸市 HP：企画調整局・未来都市政策課「市街地西部活性化プロジェクト」, 2017 (参照 2022.06)
- 7)兵庫区役所 HP・兵庫区・計画・取り組み・兵庫区民まちづくり会議, 第 12・13 期活動報告(令和 2 年 5 月作成)(参照 2022.06)
- 8)兵庫県 HP・地域・交流・観光・地域創生・地域創生の推進・兵庫県政 150 周年記念事業：「事業計画」(参照 2022.06)
- 9)兵庫県 HP・地域・交流・観光・地域創生・地域創生の推進・「県立兵庫津ミュージアム(仮称)基本計画」(参照 2022.06)